

ある日の貴方へ

増井典夫

（一九八一年四月）

これでやっと大学受験も終わり。都合三度の共通一次試験だった。三度目は大学生やりながらの受験生活だったが、二重生活というのはやはり大変だった。午後五時までは大学生で、そのあとは受験生。講義を受けたあと校門を出るまでが大学生で、そのあと家に帰って受験勉強。大学生としては、受講した64単位のうち論理学は落したものの60単位は取ったし、11月の学園祭では、徹夜で準備したりもした。よくこれで受験がうまく行ったものだと思う。

「せっかく大学生を一年やったのに辞めるなんて」と人からも言われたし、自分でも思わないでもないが、やっ

とこれで希望の大学に入れたわけだし。親元を離れ、存分に自由な生活を楽しみたい。

東北大学文学部。この一学生としてどれだけのことが出来るだろうか。この仙台の地で。広瀬川のほとりで。出来れば大学院に進んで研究者の道を歩めるように、一生懸命がんばりたいが、その前に、もうひとつの夢である作家への可能性を探ってみたい。

まずはともかく、なんでもいいから一度書いてみよう。舞台は？ そうだな、えっと、去年の夏、金沢に行った時、駅前裏通りに「放課後」って名前の小さな喫茶店があったつけ。そこから物語が始まることにしてみよう。それにあと、広瀬川のイメージを加えて。金沢だと犀川だけだね。

タイトルは？ えっと、ラベルの曲なんかどうだろ

う？「夜のガスボール」ではいくらなんでもただけど。よし、「古風なメヌエツト」これで行ってみようか。どんな作品になるだろう。ま、大したものなど書けるわけではないけど。

古風なメヌエツト

——久坂葉子に捧ぐ——

私たちはいつも「放課後」であった。駅前裏通りの、目立たないごく普通の喫茶店。まるで高校生向けとでも言うような、学校帰りにちよつと寄る、そんな感じの名前。造りも簡素で素朴な感じである。

私たちはいつもそこで語らった。もつともしゃべるのは専ら彼で、語るのは愛ではなくて退屈な話ばかりだったから、私の思いはいつの間にかどこかへ飛んでいってしまいそうな、そんな時間だった。

彼は中肉中背、真面目そうで、どここといつて特徴のない、目立たない感じの人だった。目鼻立ちを整っていて、結構ハンサムなのだった。

席に着くと、彼はいつものように、

「コーヒー二つ」

と注文した。そのあと彼はコーヒーを待つのもどかし

いらしく、しゃべりたくつてうずうずしている感じで、早々に語り出そうとするのだった。

だが、私は二言、三言「講義には出てる？」とか、「ゼミの方は？」などとかくだらないことを話しかけ、コーヒーが来るのを待った。彼が語り始める前に、オーダーの裏に印刷されてある詩らしきものをぼんやりと見ていたかったからだ。

彼は口火を切るのをやめて、少しの間、私の方を所在なさそうに見ていた。

ウェイトレスがコーヒーを運んで来た。そしていつものように、テーブルのすみにオーダーを置いていった。

私はそれを裏返した。

雪どけの水

いまの私にはないもの

だけど このまま

いまのままを愛されたい

淋しいから

あなたはうそを言っている

あなたはうそを言うよりかはなかった

だから私は

何も言えずうつむいた

切なくて

放課後

ふいに泣き出す心のさばく

海がみたい　いますぐに

あなたのなかの

海をみていたい

稚拙な、素っ気ない言葉のイメージ。技巧も何もあつたものではない。

だけど今の私にはふさわしい。だって私の心の中では砂が、狂ったように舞っているのだから。

そんな風に私は感じていた。

彼は待ちかねたように口を開いた。私はしばらくは、ただぼんやりと彼の顔を眺めているだけだった。

いくらか経ったあと、彼の言葉のいくつかが耳に飛び込んできた。

「——目覚めた者が前衛となつて、権力と闘い、権力を追放して行かねばならない。

権力のない、完全に一人一人の能力を生かせる自由な社会。それを作るためには、まず現在の政府をたたきつぶさなければならぬ。——」

自称アナキストの彼らしい言葉。初めて聞かされた

時はびっくりしたし、「すごい」とも思ったものだった。

だが、今は退屈なだけだった。

そんな言葉だけで世の中が良くなるとても思っているのかしら。自分では何も出来ないくせに。

つい、そんな風に思ってしまった。

今日はもう聞き続ける気がしない。

私はそう思った。

私の思いがさまよいはじめた。

こんな所から飛び出して自由になりたい。

一人でいたい。

そんなことを考えはじめた。

彼女は飛び出す。

あの人が待っているはずだ。「アバンチュール」、あの店できつと。

「彼にすがりつきたい。あの人の胸で思いつきり泣きたい。」

彼女は思う。

すると突然、あの人の声が空の方から聞こえてきたよ
うな気がする。

——君はすてきな人だと思ふ。すばらしい人だと思ふ。だけど、僕は君が思っているようなすばらしい男じゃない。優しさも思いやりもない。僕には君を幸福にする自信がない。

——僕は自由でいたい。束縛されるのは嫌なんだ。重苦しいような、息詰まるような感じにさせられるのは嫌なんだ。

——君には済まないと思ふ。おわびのしようもない。だけど、君は僕よりもっとふさわしい男を見つけてほしい。

「ふん、嫌いなら嫌いだとはっきり言えばいいのに。」

私はつぶやいた。

彼は口を止めて、

「今なにか言った？」

と怪訝な顔をして尋ねた。

「しまった。」

とは思ったが、平静を装って、

「え？ あなたの言う通りだって言っただけよ。」

私はそう言った。

すると、彼は何も言わずに、再び語り始めたのだった。

「そのためには、我々目覚めた者が、無知な大衆を率いて、彼らを目覚めさせていかねばならない。」

女の子相手にこんな演説ばっかりして、退屈じゃないと思っているのかしら。一体どういうつもりなのだろう。少しはロマンチックなことでも言つて、気を引こうとでもすればいいのに。

そんなことを私は思った。

もつともそれだから害がない、とも言えるのだが、などと考へて、いくらなんでもちよつとひどいと考へ直した。

「そのためには、一時的には暴力を用いてでも、政府を倒し、我々目覚めた者が政権を握らねばならない。」

彼の憂さ晴らしの相手になってあげるのもいいけれど。

私はまた考へ始めた。

私はこの人を愛することなんてできない。いや、私はもう誰も愛せない。

『あの人はすばらしい人だ。』

ギリシア彫刻のような彫りの深い顔。背が高く、細身ながらがっしりとした身体。成績はクラスでトップだし、スポーツはうまいし。ピアノは抜群、知性がきらめいているよう。

だけど、何よりもあの人の優しさが、思いやりが。

私の心を魔法にかけてしまったかのように。

あの人の全てがすき。いつまでもあの人を見続けていたい。」

彼女はそんな風に思う。

いつまでも、あの人のそばにいたいと思う、ただそれだけのことなのだけれど。

「我々目覚めた者が、一時的にせよ、独裁政権を打ち立てて、理想的な社会を作った上で——」

彼はしゃべり続けた。しかし、私はもう聞いてはいなかった。私の思いはどこか別の所へ飛んでいた。

「彼につり合う女だなんて、そんなこと思っても見なかった。それぐらいわかってた。

ただあの人のそばにいたかった。それだけなのに。」
思いが胸にこみあげる。

そのくせ彼女はふと、また考える。

「嫌いなら嫌いとはっきり言ってくれば。」

「それだったら、まだあきらめがついたかもしれないのに。」と。

「権力を追放し、完全に自由な社会を作らねばならない。」

一通りしゃべり終えたと思えて、彼はひと休みし、コーヒーをぐいと一息に飲んだ。さも満ち足りた様子で。

この人は、こんな風にしゃべるのが生きがいのだろうか。こんな時間が一番楽しいのだろうか。誰にも同意は得られなくても。それとも同意は得ていると思っっているのだろうか。

そしてまた、ふと私は思った。

これまでに会った時と同じように、私は相づちを打ち続けたのだろうか。無意識のうちに。

そんな風に考え出したら、自分というものがわからなくなってしまう。

しばらく私は、彼はいい人だ、本当は優しく、思いやりのある人だ、などと考えようとしてみた。

だが、すぐその思いを打ち消すかのように、こんな思いがつのつた。

今の私には、もう誰も愛せない。

まるで空虚な毎日。からっぽの日々。今の私の心には何も無い。何も存在しない。

そんな思いが高ぶって、急に私は彼の存在をわずらわしく感じ始めた。

ただずるずると、彼といつも会っていた「放課後」なのだった。

彼の幸福そうな顔なんか、もう見たくくない、今すぐこの場所から飛び出したい。

そんな思いに私は駆られた。

ここから出て行きたい、今すぐに。

私は飛び出そうと試み始めた。何度も何度も。

そして私は、ついにその場所からの脱出に成功したのだった。

私の抜け殻をそこに残したままで。

私は歩き出す。無性にピアノが弾きたくなって。ラベル。「夜のガスボール」を。

——あなたはラベルなど全然弾けないじゃない。

「そうよ、弾けないわ。だけど、それでも弾こうとするのが私らしい所じゃない。」

——わかったわ。だけど、あんまり人前で、ピアノを弾けるって顔はしないほうがいいわよ。

「余計なお世話よ。」 私は街を歩く。川に沿って、ただぼんやりと。

晴れた日の川の流ればいつも優しい。川はまるで、過ぎてしまったこと全てを洗い流すかのように。

川原に降りて、腰を降ろす。

しばらくして、私はかばんから日記を取り出す。

私の心の形見。たった一つのささえ。やがて私はぼんやりと眺め始める。

一月十一日

一番大切なのは、歩いている時間。物思いに耽りながら、「この思いを表現できたら」などと思いつながら、私は歩いているの。

足の裏が痛くなって、足全体が重くなって、それでも休まないで、立ち止まらないで歩き続ける。街の中を、橋の上を、川に沿って、風に吹き飛ばされそうになりながら歩くのが好き。

「どこか遠い見知らぬ世界へ飛んで行ってしまいたい。」
いつもこんな風につぶやいてた。うまく行かなかつたこと、失敗したことを思い出したくなくて。きれいさっぱり忘れてしまいたくて。忘れることなどできないってわかってるくせに。わかっているから。

どこか別の世界へ。どこか遠い世界へ。

この世界とそっくりでしかも違っている世界。未知の世界。そんな世界への思い。あこがれ。幻想に過ぎない

ことはわかっていたはず。それなのに。それでも。

たそがれ時に、橋の上から上手の方を眺めていた。霧がかかってよく見えない。まるで印象派の絵の世界。それとも象徴詩の世界かな。

霧の向こうはどんな所だろう。黄泉の国、忘却の河、それとも世界の果てかしら。

だから私は歩き出した。この道が終わらなかつたらいい、どこまでも続いていたらい、私を世界の果てまで連れていってくれればいいと思つて。

（一九八五年三月）

いよいよ卒業式。あつという間に過ぎたような気がする。僕はこれから大学院生として学生生活を続けるわけだから、卒業式といつても特別な感慨はないけれど、友人たちが就職で仙台を離れていくのは、ちよつと寂しい。ま、寂しがつていてもしょうがないけど。

大学院に進むという一つの目標は達成したわけだけど、作家としての才能はやつぱりないみたいだ。「古風なメヌエット」、あれはあれでかわいい作品だとは思う

けど、でも、それだけ。結局、自分の経験の範囲内のことしか書けないわけだから。イメージネーションの欠如。これじゃ駄目だよ。ま、「あの続きが読みたい」なんて言つてくれた人がいたのはうれしかったけど。

続きか。なんかちよつと書いてみたくなつたな。ほんのちよつとだけ。書いてみようか。

ところで、最近、周りの連中が、俺のこと「いい奥さんになれるよ」とかなんとか冷やかすんだよな。細かいことに気がつくからつて言うんだけど、ほんとにそうかな。それにしても、全く、どういふつもりなんだか。

咳 き

「いい奥さんになれるよ」

つて、この頃よく言われるの。コンパの席でとか。ほんの冗談なんだろうけど。「そうなのかな」なんて思つたりもする、ひとりで部屋にいる時なんか。自分のことをあれこれ考えたりしてると。

「他人を批判しない」「他人のために尽くす」「仕事は有能」「感情を表に出さない」「頼まれたら断れない」
e t c .

この間、ある雑誌の性格テストをやつてみたら、「古

き良きおふくろさんタイプ」なんだって。笑っちゃうでしょ。でも、案外、当たってるかもしれないナって思うの。例えば、細かな所、余計な所にまで気をまわしてしまふ所なんか。

「いい奥さんになりたい」なんて思ったことなかった。そんなタイプじゃないって思ってた。何ものにも囚われないで、自由に軽やかに生きてみたいって思ってた。

個性的で、素敵な女。魅力的な女。あなたの言うような「いい女」。かなわないまでも、少しずつでも。そんな女になりたかった。

バカみたい。私、全然そんな女じゃない。そんな風にはなれっこない。そんな風には出来てない。

あなたと出会えたこと、あなたと過ごせた日々。私の大切な思い出。あなたに愛されたこと、私の財産。でも、あれでよかったですんだって思う。あんな素晴らしい時がいつまでも続くわけない。そんなことぐらいわかってた。「いい女」を演じ続けようとするなんて、もう出来なかった。

壊してしまったのは私。私のせい。あなたじゃない。あなたは最後まで優しかった。そんなあなたの優しさ、私にはとてもうれしかった。だけど――。

今、部屋には橋本一子のピアノが流れてる。印象派だな、橋本一子って。印象派をモダンにした感じ。現代風っていうのかな。こんな静かな夜にはぴったりの音楽。空気が澄み渡っていくみたい。

手紙書くつもりだったのに、気がついたら独り言を並べてた。いいんだ、手紙なんて出せるわけないんだ。迷惑かけるだけ。そして自分がはじめになるだけ。そんなことぐらい、わかってるンでしょ、バカめ！

もう、私、背伸びなんかしない。私らしく、自然に生きるしかない、って思ってるんだ。

魅力的にはなれなくても。「古い女」でしかなくても。平凡な人生しか送れなくても。

「いい奥さん」にはなれなくても、「平凡な奥さん」ぐらいにはなれるかもしれない。いつになるかはわからないけど。

電話の前に立った。ダイヤルを回そうとした。けれど、結局、回せなかった。

「今さら、何を話すというんだ」

今でも好きだよ、なんて言っても。言ったって何になる。以前のように付き合えるのか。以前のように愛せるのか。

「愛せる。いや、愛してる」だから、心を開いてさえくれば。

やめよう。未練がましいことは。ただ迷惑をかけるだけ。

「やっぱり、俺には片思いが似合ってる」一生独身を続けることになるかもしれない。それが、一番いいのかもしれない、ひよつとすると。「俺はいい加減な男だから」

きょうは酒をあおつて寝よう。彼女の幸せを祈つて。いい男が見つかりますように。そうしたら、安らかな気分ひとで寝られるかもしれない。

でも、やっぱり今日も寝つけない夜になりそうだと彼は静かに呟いた。

（一九八九年三月）

八年間いた仙台ともとうとお別れ。

楽しかった。精いっぱい出来たと思う。でも、たった一つ、あの人のことだけは。

どうしてあんな風にしか出来なかつたんだろう。どうしてあんな風にしか言えなかつたんだろう。

やめよう。過ぎてしまった事なんだから。振り返つて

も仕方がないじゃないか。

昨日、街角で偶然見かけたあの人は、前よりも一段と輝いて見えた。声を掛けようと思ったのに、でも出来なかつた。これが僕の限界なんだろうか。最後にさようならつて声を掛けるだけで良かったのに。まったく。情けないって言うか。

でも、これが僕らしいのかもしれない。自分は自分らしくしか生きられないんだし。最後にあの人の姿を見られただけでも幸福だったような気もする。

今のこの思いをあの人に伝える事は出来ないけれど、でもこの思いを書き留めておきたい。たとえば。こんな風に。

ある日の貴方へ

なぜかとてもHAPPYな気分
街角でふと見かけただけなのに

春風に吹かれながら

古風なメヌエツトを口ずさんでる

あなたの後をつけてみたくて
振り向いて歩き出した

でも

さよなら

独り言 眩き

止まらない時間

